

# 大学におけるボランティアセンター設置にかかる実証的研究

樋口 義博

## 1. 研究の目的と背景

### 1) 研究の目的

本研究では大学ボランティアセンターの意義、事業内容、役割、センターの類型など概要の整理を行い、なぜ、大学においてボランティア活動が推奨されるのか、大学にボランティアセンターを設置することの有効性は何かについて検討し、大学にとってボランティアセンターが有効な教育ツールであること、大学にとってボランティアセンターが必要な組織であることを立証することによって、自身が勤務する名城大学において、いかにボランティア活動に大学として取り組んでいくべきかを明らかにすべく研究を進めた。

### 2) 研究の背景

ボランティアを教育活動に取り込む動きが全国の大学に広がっている。

1995年1月に発生した「阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）」での学生ボランティアの活躍を背景として、全国の数多くの大学にボランティアセンターが設置された。その後、文部科学省の政策GP（Good Practice）などの実施により、大学のボランティアに対する取り組みが活発化した。各大学の取り組み方は多種多様であり、大学のミッションとしてボランティアセンターを設置している大学もあれば、研究室単位でセンターを運営しているといった大学もある。

多くの大学がボランティア活動の重要性に気づき、ボランティアに関連する組織を立ち上げるべく活動しているが、設立の理念、規模、地域差など様々な阻害要因もあり、その必要性を理解しながらも機関設立に至っていない大学も少なくない

ことがあげられる。名城大学も同様であり、担当者としてジレンマを抱えている状況であった。

## 2. 研究の方法

### 1) 大学ボランティアセンターについて

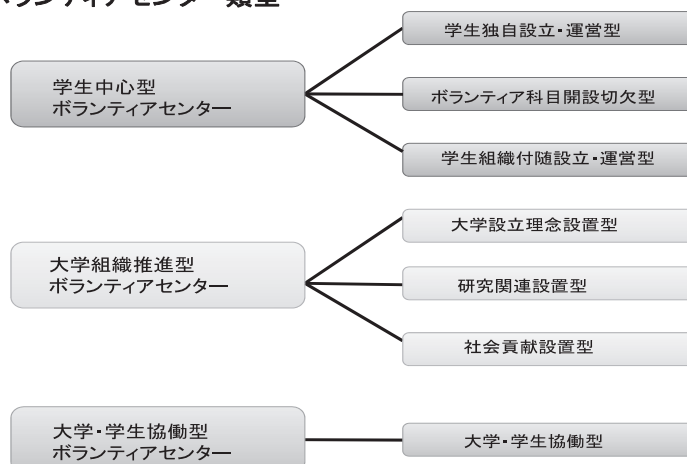
大学ボランティアセンターが日本の大学において初めて設置されたのが1987年の大阪キリスト教短期大学であった。当時設置されたボランティアセンターの多くが「慈愛の精神」を設置の理念として掲げており、大学の理念のもと、大学主導でのセンター設置の事例がみられた。以降、大規模災害の発生を切欠としてボランティアセンターが設置される事例が多く見られ、また、近年は、GPなど文部科学省の政策などを切欠として大学主導によるボランティアセンター設置の事例が増えている。ここでは、大学がボランティアセンターを設置する理由としてこれらの要因に加え、ボランティアが高い教育効果を得られることを示した。

また、現在設置されている大学ボランティアセンターの事業内容を整理し、「情報提供」「事前・事後研修」「ボランティアコーディネート」「プログラム開発」「緊急援助活動支援」「ボランティア関連授業の実施」「人材育成」の7つを挙げ、大学ボランティアセンターを設置する意義として、「学生への教育効果」「社会・地域とのつながり」「社会貢献」の3つがあることを示した。

## 2) 大学ボランティアセンター設置過程の実態分析

全国の大学に設置された大学ボランティアセンターの設置過程に着目し、大きく3つに類型化、さらに7つに分類した。

### 大学ボランティアセンター類型



また、実態調査の結果、センター設置の促進要因として「学生のニーズ」「大学の理念」「教育とのかかわり」「学長のリーダーシップ」「地域からの要望」「教職員の理解」の7つが重要であることを示した。

## 3) 名城大学ボランティアセンター設置に向けて

名城大学においては、ボランティアセンター設置への学生のニーズはあるものの、学内における認知度、ボランティアの位置づけが明確ではないことが課題として挙げられた。

また、名城大学においてボランティアセンターを設置するには、類型として大学・学生協働型ボランティアセンターの形態をとり、名城大学ボランティア協議会の理念を前面に出した「名城大学ボランティア・地域連携センター」として地域を重視したボランティアセンターの設置を提言した。

## 3. 結論と今後の課題

大学ボランティアセンターを7つに分類したが、各大学それぞれの特色が強く出ており、7つに分類することが困難であった。大学創設の理念の影響を受けている大学、教育内容とのつながりが強い大学など多種多様であり、今回の7つの分類では不十分である。結論として、大学ボランティアセンターの設置は大学の持つ歴史、バックボーンが大きく影響するということ、大学の持つ個性に沿った形でのボランティアセンター設置が重要であるということがあげられる。それは名城大学でも同様である。

今後の課題としては、今回の論文には「サービス・ラーニング」の視点を組み込むことができなかった。大学がボランティアを「学び」として教育に取り入れる場合、サービス・ラーニングは不可欠な要素である。今後は、サービス・ラーニングの視点をいかに組み込んで組織構築を図るかという部分を補完する必要がある。